全国重症心身障害児（者）を守る会機関誌「両親の集い：３８４号」1988.寄稿原稿

ノーの保障

阿部幸泰

重症児と呼ばれる子どもたちに接して、２０数年が経過しようとしている。この間「この子等にとって何が大切か」と考え続けてきたが、最近その一つとして「ノーの保障」ではないかと思うようになってきた。イエス、ノーのノーである。

というのは、多くはことばで自らの意志を伝えることのできない彼等であっても、援助を行なう大人（家族、職員など）の行為に対してノーのサインだけはどの子も示してくれる。

それらのサインは、泣いたり、表情を変えたり、食事の時あるものには口を開いてくれなかったりなど、不快や拒否のサインといってもいいものであるが、いずれにせよそれらのサインにその子の個性が存在し、その子の意志が存在していると思えてならない。

（大人の側の思いこみでサインを見過ごす恐れ）

重症児は、大人の援助なくしては一日たりともその生存すら危ぶまれるほど、生命、生活全てを大人の援助にゆだねているといっても過言ではないと思う。

それだけに往々にして、大人のペースと都合によってことが運ばれざるをえない状況にある。そのために、日常のなにげない場面で示される彼等のノーのサインは、時に大人の「思いやり」という名の思い込みや大人の都合の前に見過ごされていることがあるのではないかと思う。

こうした彼等のノーのサイン＝意志にどう対応していくかという取り組み方が、重症児に関わる大人にとって大事な視点と思えてきた。

（異論を大事にする社会、個人の尊厳の問題にも）

一方私たちにとっても、日常生活や職場において相手との話の中でノーと主張することはかなりの勇気のいることであり、それは誰もが経験している。

人間関係がまずくなるのではないか、ノーと異論を主張すればそれだけ責任が伴ってくるのではないかなど気苦労がたえず、いっそイエスマンの方がどんなに気楽かと思うことがしばしばある。

しかし異論を大事にし、かつ民主主義のルールに従ってことを運んでいく社会の建設こそが、単に科学技術発展だけでない「文明の発達」ということでもあろうと思う。

こうしたもろもろのことを考え合わせると、ことばで自らの忠意志を大人に伝えることの大変困難な重症児に対して、彼等のノーのサインを大切にし、その対応に苦慮を伴いながらも取り組んでいくことは、ひいては私たち人間全ての個人の尊厳と自由の問題に通じていくものと思う。

それゆえに、重症児の「ノーの保障」という視点が、もっと真剣にまた具体的に論議されていって欲しいと願っている。